

ある時、学校前の万屋を兼ねた自転車屋で、修理作業を見ていたら奥から見慣れない若い人が出てきて声を掛けられた。

「授業はどうしたの？」と、きれいな標準語で言った。

康夫は応えられないで、特技となった無表情で黙っていた。

彼は、康夫の手にした文庫本を指して、

「何読んでいるの？」と、聞いた。

康夫は黙って本を渡した。

「へえー、ガラス玉遊戯か、ずい分難しい本を読んでいるんだね。あれ？これ下巻だね。

じゃー、上巻は読み終えたわけ？」

その人の目はきれいだと思った。声も発音もいい。急にドキドキして、

「はい・・・これ、読んだですか？」と、声に出した。

「ああ、ヘルマン・ヘッセだろ、高校の時読んだよ。ガラス玉遊戯は上巻出だしが難解だったなー、上巻の三分の二までは苦労したよ。君は何年生？」

「二年です」

「えらいなー、車輪の下は当然読んでいるよね。あれから先に読まないと、これは読み切れないから・・・」

彼はヘッセを読んでいる。それに彼の目は澄んでいるし、穏やかに話すきれいな発音も、康夫の力の入った警戒感を取り払ってくれた。

「時間があるなら、こっちへ来ないか」と、誘った。

自転車万屋と文房具屋が並んだ路地へと案内して、裏にある離れ家に入れと言った。

中は八畳だけの小さな平屋で机と本棚と洒落た傘のスタンドが目についた。彼専用の勉強部屋だと言った。本棚に並ぶ本は読んだこともないものばかりで背表紙から難解な本だとわかる。彼は哲学が専門だけど詩や文学の方が好きだと話した。

そして、ゲーテやボードレルなど康夫の知らない世界を自慢もせず真摯に話しかけてくる。初対面にも関わらず次から次と作家名を上げて詩を朗読したり、作家の真意を説明したりした。康夫は詩の内容もわからず返す言葉を失っていたが、彼の穏やかな話ぶりが次第に魅力的に聞こえてくると、理解出来なくても不思議に胸が高鳴った。

「前から、ここにいらんだべか？」と、聞いた。

「いや、まだ来て三日ばかりだ。この叔父さんの処で厄介になっているのさ」  
彼はR大学の三年生で胸の病のため休学して、空気の澄んだこの地で静養していると  
言った。目が二重で大きく端正な顔だけど、背丈は康夫より少し高いだけで大学生にしては  
低いと思った。歳は七つ違いたが、どちらかといえば童顔で高校生といってもおかしくな  
い。まるで兄貴みたいだ。だけどハイルナアではない。もっと落ち着いている、大人以上  
の青年だ。ゆつたりとして暖かくて心地いい。この部屋もいい。数学時間の隠れ家にもつ  
てこいだ。

康夫は不安げに、またこの部屋で話してできるかと聞いた。彼は、自分も暇を持て余して  
いるからいつでもいいと言ってくれた。康夫は藁にもすがる気持ちがあった。話が途切れ  
ると、また同じことを言うものだから、彼は微笑んで優しくいいと言ってくれた。

この人は自分の歩む道に自信を持っていると感じた。そして、勉強家だ。この人をもつ  
と知りたい、深く知りたい。この人とヘッセの話を一杯したいと思った。彼の未知な中  
にすつかり引き込まれてしまった。

「クラブ活動終わったら、また話してもらえんべか？」

「何クラブ入っているの？」

「卓球クラブです」

「それじゃー僕と同じだ。大学のクラブさ・・後で見に行くよ」

「エーッ、嬉しいけど・・たぶん、ダメだねー」

「ハハハ、大丈夫だよ。校長先生には大学で卓球クラブに所属しているからと、了解得  
るからさ」

「エエー・・」

「それにねえ、校長先生と僕は同じ大学だから、ね！つまり先輩になるのさ・・」

「ハア〜？」

「じゃー、後でね」

「ハア・・んじゃ〜？・・オッ、おらの名前は、康夫です」

「僕は水野だ。よろしくね」

何故だろう。その時、康夫は飛び上がらんばかりに嬉しくなった。こんな気分は久しぶ  
りだ。泣かないと決心していたのに、嬉しくて、嬉しくて、目頭が熱くなった。

見えない神は試練もくれたが、ボロボロに壊れかけた康夫に、なんて素晴らしい潤滑油

をくれたのだろう。何に、どうしたらいいかわからない。ただ、「ありがとう」と、心でつぶやいていた。

授業が終わってクラブ活動の時間になった。Nという社会の先生は、是もない非もない年寄りの先生で、指導などできない名ばかりの卓球クラブ顧問だった。クラブ員は一年生二人含め六人しかない。E校の卓球クラブはいつも一回戦で敗れる歴史ある弱小チームだった。卓球台をセットして準備体操をしている時、N先生に連れられて水野さんが顔を出した。康夫を見とめると目配せして笑顔を見せる。康夫は照れた。

N先生の集合の号令があつて、水野さんを臨時指導員として紹介された。水野さんが挨拶する。

「・・・紹介されたR大学卓球クラブの水野です。これからみんなと一緒に、卓球クラブを強く、たくましく、そして、楽しくするよう努力します。兄貴と違って何でも相談してください・・・僕は東京の真ん中に生まれ肺を患いました。今、会津の美しい風景に囲まれ、澄み切ったきれいな空気で、その患いを癒すためここにいます。だけど、会津に来てみてすぐ感じました。体を心配するのが一番ではなく。心を癒すことが一番大事な治療だったのです。みんながうらやましいです。この自然がうらやましいです。僕はここでは一人ぼっちの都会人ですが、一緒に会津のきれいな空気を吸って卓球をやれるのがとても楽しみです。お互いに卓球という技を深め合うことができれば、僕を癒すこの地に、わずかでも恩返しができると思います・・・最後に、N先生と校長先生の寛大なるご厚意に感謝いたします」

六人は精一杯の拍手をした。標準語できれいに話すその挨拶だけで感激していた。

最初の卓球指導は、水野さんが一人相手で、康夫達全員が順繰りに一球ずつラリーをする練習だった。始まるとすぐ皆驚いた。どんな球でも水野さんは苦もなく返してくる。ラリーを止める方は我々で、水野さんはミスをしなない。難しいバックハンドの返球は見たこともない見事なものだった。N先生も見ていて大仰に驚いていた。水野さんが返球する球は次第にやさしくなつて、ラリーも長く続いて行く。こんなに面白い練習はこれまでなかった。仲間も同じ思いだった。クラブ終了後には、皆、水野先生と呼ぶようになっていた。

康夫はもつと楽しかった。水野さんに期待した以上のものを目の当りにして胸が躍るのを押えきれなかった。たった一日の出来事で、こんなに沢山の贈り物を授けてくれるとは。もし、神様がそう仕組んだとしたら、運命を呪おうとした日記に後悔の烙印をすぐにでも

押そう。〇と書いて懺悔しよう。目に映るものすべてに光が射してくるようだ。水野さんはこの会津の自然に患いを癒されたと言った。康夫の壊れた心の患いは彼によって癒されるかもしれない。

今こそ、神様が差し伸べる手にしつかり捕まるんだ。

放課後一人だけで水野さんを訪ねたかった。だから、クラブを終えても帰らないでグズグズしていた。

「まあ、上がれよ。疲れていないか？」

水野さんは快く迎えてくれた。

「はい、ぜんぜん。楽しかったです」

うまく感謝の言葉が表現できなかった。だから、つまらない質問をした。

「会津の、この風景がいいんだか？」

「康夫君はヘッセが好きだと言ったね。僕はヘッセの描く風景と、会津の風景は何も変わらないように見たけどね」彼は穏やかに微笑んで言った。

「・・・」

沈黙が続くと、また、つまらない質問をした。言葉も考えも未熟だった。

「おら達、卓球下手だべ？」

「今はね！でも、それがどうしたの？」

「試合は、あと一ヶ月で会津大会があっけど、勝ったことねえんです」

水野さんは笑って言った。

「勝てると思って練習すれば勝てるし、負けると思ったら負ける。でも、勝ち負けとか、そんなことも実は重要じゃないよ」

「んじゃ、なんだべ」

「ただ、練習して精進すること。そして、その精進を楽しむことだよ。簡単さ、勉強でも何でもそうさ」

「・・・水野さんはスルツと答えたんだー、うらやましべ。おらー、いっぺんに水野さんが好きになっただ・おらみての迷惑でねえべか？」

「迷惑なもんか。僕も、素直で正直な康夫君が好きだな。それに、勉強家だもんな」

「そう言ってもらえつと、嬉しなー。だげんじよ、おらー、勉強なんか嫌いだべ」

「じゃあ、ヘッセは何なの？」

「んー？なんだべな・・メタファアだべか？へっせの・・ポジティブなメタファアだべな。違つてんかもしんねえーけど」

「充分勉強家だよ。それでいいんだよ。ますます君が好きになりそうだ」

「いやー、ごまかしだべ。水野さんにや、カッコ良く言わねばー・・」

二人で笑った。康夫は、心から晴れ晴れと笑っていた。

水野さんが、提案があると言った。

クラブ活動の後、彼はN先生と二人で校長室に行ったと話した。校長先生と水野さんは既に面識があり同じ大学の出身なことも承知していたし、ずい分話も弾んだらしい。

そうした雰囲気の中で、N先生は以前からかかえるクラブ活動の問題を話し出した。つまり、我が校の狭い体育館の使用は各クラブ同士で取り合いになっていて、バスケット部が四日使用で卓球部が二日だから練習できない日が多い。

毎年入部する部員数が足りないのは練習場所がないことが理由で、会津中学卓球大会の団体戦に出場できないことさえあったし、大会がいつも一回戦で敗れるのも、それが元で悪循環になっていると説明した。また、他のクラブ員達と違って最も大事なことは、やりきったと言う充実感を持ってないまま卒業して行く部員達のことだと説明した。

水野さんは大学の事例を出して、早朝練習はどうかと提案した。大学では珍しくない事で、むしろ早朝練習は効率が良くと話したそうだ。校長も大学の後輩からの勧めでもあったし、彼の指導も確かだと聞いたので、とりあえず承諾されたと言った。

「まあ、君達がどう思うかだけだね。朝練は大変だけど、参加できそう？」

「おらー、やりてえーだ。水野さんに教えてもらえんなら、こんな嬉しことねえべ。みんな、やるって言うに決まってるだ！」

「そうか。じゃー明日からやろう」

「じゃけんど、みんな帰っちゃったべ」

「明日は、君だけでもいいさ。すぐ実行に移すのが僕の主義さ！」

朝練は早朝七時から始まって八時に終了する。参加者は二年生四人が主で団体戦ギリギリのメンバーだ。休む者はいなかった。一年生は時々参加して球拾いを手伝った。水野さんを見ているだけで上達するのが不思議だと思った。水野さんの指導は日を追うごとに猛練習となっていく。猛練習といっても効率が良くて解り易いのでメキメキ上達した。あのバックハンドも伝授されて、それなりに形になっていった。フォアハンドのラリーもバックハンドのラリーも、形を崩さない基本を学んだから難なくこなすことができるようになる

って、みんな増々面白くなってくる。水野さんを中心にして六人の結束も上達するほどに強くなった。もう朝七時には二年生四人とも顔を揃えて、水野さんが鍵を開けるのをせかすほどになってきた。

「高橋君、おら達、うまくなったなあー」

「んだな、水野先生のお陰だべ。先生はすばらし人だべ。あんな人になりてなー」

「康夫君の言う通りだ。教え方もうめえもんな」

「みんな、あんな立派な先生だったら良かんべなー・・・」

○

中学二年生にとって最後の会津大会が始まった。

大会会場は朝早くから大混雑だ。町場校の1中〜4中は下級生応援の数がハンパなく多い。各校とも二十名位いる。我が校は背の低い頼りないチビの補欠傭員A君とB君、たった2人だ。二人は会場の雰囲気圧倒されてちぢんでいた。

卓球の会津大会は団体戦から始まって、正午ちようどから個人戦も始まる。すると、団体戦、個人戦は混然一体となって実に忙しくなってくる。昼食はどの学校も試合のない合間にそれぞれ勝手に食べるという状態だ。我が校は例年一回戦で団体も個人戦も敗れるから、いつものんびり昼食を食べての観戦となっていた。だから勝ち上がる忙しさの経験を持たない。

団体一回戦は、狐につままれたかのように、歯応えもなくストレートで勝ってしまった。

「あらまー、なんとも簡単に勝っちゃったべ」

「先生伝授の変化球サーブ、効いたなー」

「ハハハ、びつくらこいてたなア。こりゃ、おもしれえぞー」

「ところで、康夫君、水野先生は？」

「んー？どしたんだべな。もうすぐ来んべよ」

団体二回戦が始まって水野さんは来ない。先鋒、高橋君負け。次鋒、五十嵐君勝ち。ダブルス、康夫と高橋君の勝ち。副将、千葉君負け。

「アッ、やっべーでないの。康夫君、大将戦たのむぞー。水野先生来るまでガンバンベやー」

数ポイントの2セット連取で楽勝とは言えないが、康夫は何とか大将戦をものにした。

「やったーッ」

「先生、何してんだべ。いやー、あぶねえ、あぶねえー」

個人戦始まった。康夫と高橋君が個人戦に向かう。

「がんばれよーッ」、「おーッ」

個人一回戦、康夫の勝ち。そのまますぐ団体戦に戻る。高橋君、個人戦対戦中で戻れないまま団体三回戦始まった。先鋒、千葉君勝ち。個人一回戦高橋君の勝ち、高橋君団体戦に走って戻る。次鋒、五十嵐君負け。ダブルス、康夫と高橋君勝ち。すぐ康夫は個人二回戦に駆け出す。

「何だよー、急にめっちゃ忙しいよ。これどうなってるの？」

会場も応援人の移動もあって、荷物と人と足の踏み場もない状況になった。場内放送も頻繁に選手呼び出しが多くなる。

「アッ、高橋君まつじいなー。ここで決めねば、やっべえぞ」

高橋君、からくも勝つ。団体戦は三対一で勝利確定。しかし喜ぶひまなし。高橋君はすぐ個人二回戦に向かう。康夫は個人二回戦を勝つてすぐ戻ってくる。

「康夫君、めし食えよ。大将戦はチビのA君でいくから、めし食って少し休め」

団体三回戦は三対一で勝ち確定だから、大将戦はチビA君を出場させて康夫を休ませる作戦だ。棄権はできない。棄権すれば団体は負けになるからだ。我がE校はメンバーギリギリだった。

「んだな。それより、高橋君がまた勝ったら個人と次の団体で、ぶつかっぺよ」

「まぐれは、もう終わりだべ」

チビのA君が試合に出れると知って嬉々としている。それも大将戦だ。対戦相手と並んで試合初めの礼をしたら背格好が相手大将の半分くらいに見えた。またA君がおびえたようにキョロキョロするから可笑しくて、笑い声があちこちでした。

高橋君、個人二回戦フルセットで勝って戻る。

「エーッ、また勝っちゃったのー」

「水くれるー」高橋君が水要求する。

一年生チビB君、やかん借りて水汲みに走る。

団体戦準決勝始まる。

「先鋒、誰にすっぺ？」

「高橋君は疲れてるし、めし食ってねー。後ろに回すと個人戦やばいしなー・・・」

「あれ？水野先生じゃねー」

千葉君が、2階観客ゾーンに見つけた水野先生に手を振った。水野先生、ジェスチャーで罰点作った。そして盛んにアゴ突き出している。

「関係者じゃねーから、入れねー・・・アゴ出し、アゴ？」

「わがった。先鋒アゴ出ししろだべ、高橋君だっぺよ」

団体準決勝。アゴの高橋君勝ち。高橋君すぐ個人戦に向かう。次鋒、五十嵐君ストレイトで負けそう。すぐダブルスだけど高橋君いない。

「どうすんべ」と言って千葉君が、水野先生に指示仰ぐ。

水野先生、盛んにジェスチャーでお馬さんハイハイをして、尻を指差す。

「なに、あれ？・・・」

「アツ、わがった。千葉君だ。でっちりだモ・・・」

千葉君、不満顔で自分の鼻先を指差して確認する。水野先生、手を叩いて頷いている。五十嵐君、一セットも取れずに負け。ダブルス、康夫と千葉君も負け。

副将戦、康夫の勝ち。すぐ個人戦準々決勝に向かう。高橋君、個人三回戦勝ち。

「また、勝っちゃっだべー、こっちは、どうなってるの？」

「2対2で、千葉君追い込まれてんべよ・・・そこダーツ」

団体戦準決勝。大将の千葉君最終セットまでもつれる。応援に熱が入った。

「ガンバレ、ガンバレ、チーイバ・・・」一年生チビ二人の必死な応援の声は、町場校応援二十人に掻き消される。

千葉君なんとかジュースに持ち込む。千葉君、チラリと水野先生を見たら、バックハンドサーブのジェスチャー見えた。その作戦当たり先行する。更に、チラリと二階に目をやると秘伝サーブのサイン有り、相手がそれを苦手と見るや、その秘伝サーブで連取して勝ってしまった。

「ヤッター。決勝戦だべ、信じらんねー」

団体決勝戦は個人戦決着後になるので、もう慌てることもなくなった。

「いんや、せわしねがったなー」

康夫も準々決勝勝って戻る。

「ちかれたべー、みんな飯食った？」

「へい、おかげさんで。まったく、ハラハラドキドキで見てる方だって、もの凄く疲れっぺよ」



場内放送で高橋君呼ばれる。

「ほらー、これだも。これが疲れんだなしー」

そうこうしてる間に、次第に会場内も歩きやすくなってくる。早々に負けた学校は帰り支度を始めていたからだ。もう山は越した。

高橋君、準々決勝敗れて戻ってきた。

「あーあ、よつこらしよつと。休憩」

「おかしくね？」

「なにが？」

「忙しすぎっぺよ。普通、試合に勝ったら喜ぶ時間もあつぺよ」

「たしかに・・・」

「あっちゃこっちゃして、負けたか、勝ったか、わかんねーつつうの」

「ほらー、康夫君、また勝っちゃったよ。疲れて死にそうな面してっぺ？応援なんか、チビ二人だよ。こんなでいいのかってエー」

「アツ、帰ってきた。ごくろうさん」

「ようやつと、決勝だべ」

「エーッ！・・・んじゃ、個人戦も決勝？」

会場の照明点いて明るくなった。そこに水野先生会場に入ってきた。

「あつ、水野先生！」

「みんな、よく頑張ったなあ。疲れているだろうけど決勝の相手も同じだからな。あきらめないで全力でいくよ。いいかあー」

「オーッ」

半分位の学校がもう帰ってしまったので、学校関係者以外でも場内に入って決勝観戦ができるようになったと話した。

「水野先生が来たから勇氣百倍だべ」

「決勝戦はこの順番で行くからね。いいね！勝ち名乗りを上げるのは決勝が済んでからだよ」

「オー。じゃない。ハイッ」

「あらッ、先生！大将戦がB君になってんけど？・・・」

チビB君驚いて、メンバー表を背伸びして見た。

「そうだよ。B君だけまだ出てないからね。みんな集まって！いいかあ。この作戦はね、

まず先鋒五十嵐君が勝つ・・・次鋒千葉君ね。当然、勝つよね・・・ダブルスは余裕でしょッ。これで優勝。わかる？」

「・・・」皆、先生を囲んでいたが返事できない。

「わかりましたか！」

「ハイッ！」

事実、その通りとなつて団体戦はE校創立六十五年目の初優勝となった。そして、康夫も個人戦で優勝した。しかし、この大会で一番印象に残つて面白かったのはB君の最後の消化試合だった。当然負けはしたがバックハンドが冴えわたり、あわや1セットを取るかの勢いで皆を驚かした。それを水野さんと部員全員でハラハラしながら一緒に応援したのは本当に楽しい思い出となった。

康夫には、その後何十年も優勝した実感など生まれなかったし、やっぱり水野さんが言うように勝ち負けなど関係なかった。ただ、あの早朝練習の成果を思い出して精進する努力と達成感を実感した。

数学の時間になると康夫は必ず水野さんを訪ねた。授業を抜け出す康夫を、水野さんも不可解だと思っていたが口には出さず快く迎えてくれた。康夫には居場所を求めさまよう苦しみから解放されたばかりでなく、希望に満ちた楽しい時間になっていた。

その水野さんからは文学のこと、哲学のこと、そして時々、彼が想いを込めて口ずさむ美しい詩のことなどを学んだ。詩を語る水野さんの声の響きも心地いいし韻を踏んだ軽やかさと、なんとなく理解できそうな言葉の綾がその情景を浮ばせてくれた。その詩は水野さんの大好きなボードレールが多かった。

「君は、恋をした？」と、突然言った。

「ん？・・・どうだか、わかんねえ」と、初めは恥ずかしくてあの初恋を隠した。

「僕は、恋もしたし失恋もしたよ。それをしないと、この詩は本当にはわからないんだ。そう思っている」

「水野さんは、いいなあー」

「どうして？僕は、君の方がうらやましいと思うけど・・・」

「おら、恥ずかしくて、そんなことスラツと言えねえべし、スラツと言う水野さんがうらやましべー」

「じゃー、恋をしたんだね」

「んだ・・・」

それからはお互い遠慮なしに少しエッチな事でも何でも話した。そうして自然に話せるようになる、歳の離れた本当の友達のようになっていた。康夫は友人として魚を捕まえることとか、釣りの仕掛けだとか、ザリガニや虫の居場所とか、山菜の取れる時期など教えた。康夫が教えられることは、幼稚な上に余りに少なくて自分が情けなかった。でも、一緒に魚釣りに川へ行ったり、クラブ仲間と山に遊んだこともあった。そんな幼稚で素朴な事でも水野さんはバカにするどころか本心に心から楽しんでくれた。水野さんと二人きりの時は、『康夫君』と呼ばずに、親しみを込めて『きみ』と呼んだ。

とうとう康夫は、誰にも話さないと決心したあの誓いを打明けてしまった。一行日記の×はたった一行だけど、その想いは余りにも理不尽な泥濘となっていたまでも歩む道を乾かそうとしなかった。鉄輪でくられた車輪は、康夫には重過ぎたのかもしれない。

「そうか、前からおかしいとは感じてはいたが、君の目が真つすぐでいいから・・・だけど、それ程とは思わなかったよ」

「あんまし、水野さんがよくしてくれっから、話すのよくねえごとなんに、じゃべっちまっただ・・・許してけろなあ」

「なにを言うか。一人で解決しようとしている君は偉いと思うが・・・良く話してくれたよ。それも一つの勇気なんだね・・・実は、僕も君に隠していることがあるんだ」

「エッ・・・それはなんだべ」

「今は話さない。否、話せない。だけど必ずいつか話すよ。君から打明けられたことで勇気を貰ったからね・・・君にだけは話しておきたいと、今そう思った」

「なんだべ、みずくせええなあー」

五十年前の会津は、十二月早々チラチラ雪が降った。四方の山はすっかり雪化粧になった。特に北に見える飯豊山は裾の方まで真っ白だ。だから、正月頃には根雪となって会津盆地は一面銀世界になる。

康夫の数学の成績はみるみる落ちていって普通でもなくなった。中学二年も年を越せばもうすぐ終わりだ。それでも康夫はその勉強をしようとしなない。数字を見るだけでI先生の顔が浮かんでくるからだった。焦りもしないし、どうでもよかった。水野さんの部屋で

小説を読んだ。水野さんのようになるとボードレールも読んだ。その他には絵を描いた。その頃、ルノワールの少女像に夢中になり模写もして、絵の中の少女に恋をした。あの同級生への初恋はいつの間にか薄れていった。

水野さんは康夫の少女像の模写を見て、とても褒めてくれた。

「ルノワールが好きなんだね？」

「んだ。最近、特に好きになっただ」

「そうか。僕は絵よりも、どちらかというと映画や演劇の方だな・ジャン・ルノワールというフランスの映画監督はルノワールの次男だよ・それに、この辺じゃ上映されたことないだろうから知らないと思うけど、天井桟敷の人々」という映画があるんだ。その映画の名脇役として、長男のピエール・ルノワールが出演している。第二次世界対戦時に創られたフランス映画だけど、今でも映画評論家達の中では最高の映画とされているんだ。僕も一番好きな映画だから何度も見たな」

「水野さんが好きなら、おらも見たいべ」

「主人公は無言劇。つまり、パントマイムって知ってる？」

「水野さんが得意なジェスチャーだべ！」

「ハハハ、うん、まあそうだ・主人公は無言劇団の監督の息子でバチストという若い男だけど、小さい頃のできの悪さから父親の信用を失っていたから、上演する無言劇では愚かなピエロ役ばかりさせられた。でもね・本当は頭がよかったんだ。それをバチストは自分を隠してピエロになりきっていた」

「・・・」

「ある日バチストが、貧しい女の人だけど、純粋な情熱を持って恋をした。そして、こんなこと言って告白するんだ。『あなたがここにいるから、幸福で震えてしまう』・・・すると女は、『まるで子供みたい。そんな愛し方は小説の中だけよ。夢の中だけよ』なぜ、女の人は、そんな風に言うかわかる？」

「ん？わかんねえ・・・」

「貧しい女の人は、その美貌と貧しさのために、裸体を見せるようなエッチな仕事をしないと食べていけなかった。だから、余りに純粋で素直なバチストのような告白には、嬉しかったけど慣れていなかったんだ」

「バチストは？それから？・・・どした？」

「気になる？・・・」

「やんだなあー、うめえことじらすべよー」

「バチストはこう言った。『夢も現実も同じだ。でなければ生きる甲斐がない。僕が愛しているのは現実じゃない。あなたただけだ』・・・わかる？」

「・・・」

「バチストの愛は純粹過ぎて盲目だ。現実の生き方をしている女の人には、それが怖い  
のさ。女の人は大人の汚れた水に慣れてもいたんだ」

「んじゃ、女の方は、バチストをあんな好きじゃなかったのけ？」

「いや、凄く好きだった」

「んだったら、どしてえ？」

「ほら、君は今、どうして？と言ったね・・・バチストもどうしてだと言った。バチストは、すぐに愛して欲しい。バチストが愛すように同じ情熱で愛して欲しい。そう思っていたんだね」

「・・・」

「ある日、女の方が楽屋で化粧を落としている時、花束を持った金持ちの紳士が現れた。紳士は自信たっぷり大人の虚栄心からくるキザな愛の告白をした。彼女は貧しかったけど、金持ちの紳士に好意は抱かなかった。既にバチストを愛していたからね・・・だけどバチストは、盲目の愛のために誤解してしまった。そして花束をメチャクチャに、こうやって棒を振り回して壊して暴れた。女の方はその痛癢の凄さに驚いて、『やめて、バチスト』と叫んだ・・・」

「・・・」

「でも、バチストは杖の棒で花を叩いてやめようとしな。『バチストか・・・バチストとはなんだ？・・・愛している人に愛されもしない。間抜け面のバチスト。ろくでなしだ！幽霊だ！死んだぬけ殻だ！』と、そう叫んで大きな鏡に映った自分に、チョークで×と書きなぐった・・・」

その時、康夫の胸がドキンと鳴った。まるで、バチストは自分ではないか。何か理不尽なものに壊された自分ではないか。さ迷い歩く自分に、バチストの姿が重なっている。

「これの全てを解るには、もちろんこの映画を見なければならぬけどね・・・なぜ、こんな話するのか・・・わかる？」

「・・・うん」

「少しは、わかったんだね・・・君もバチストと似て感受性が強いし、賢いから・・・僕は

純粋な心はとても大切だと思っている。しかし、大人の世界をただ嫌って理解しようとして逃げてばかりじゃいけない・・・君が大人になる努力と準備を怠れば、その真意はわからないままに大人になってしまう。僕は、君の我慢強さがバチストのような不幸な結末を呼ぶのではないかと心配してしまうよ・・・ハイルナアにならないようにと決心しても、果たして今の君はそうなのだろうか？疑うな・・・僕は違うと思っている。似ていなくとも同じ世界にいつまでも留まっているように、感じるな」

水野さんはジッと康夫を見ていった。理不尽に降りかかったことにしろ、その全て投げ出して自分の好きなことだけに逃げるのは決していいことではない。学校の勉強もしないとダメだと康夫に言った。もう、冬休みを過ぎれば二年生はすぐに終わってしまう。授業の遅れは今しないと手遅れになると言った。

「卓球でした朝練のように、僕と一緒に勉強をしないか？・・・冬休みに、雪の中をここまで通うのは大変かと思うけど、君がその気なら僕は一生懸命教えてやってもいい。運命は、与えられるものだけじゃない。自分で切り開くものだよ・・・どうだ？」

水野さんが一生懸命に教えると言ったその言葉に、何故か、康夫は自分の成績が落ち込んでいるのを恥ずかしく思った。嬉しかったがとても恥ずかしいと思った。そして、心からお願ひしたと思った。でも、どう返事したかよく覚えていない。

「そうか！偉いぞ・・・なに、卓球は優勝だもんな。勉強なんか簡単に頑張れるさ」

勇気を与えるその優しい思いやりは、康夫の心に光を射してくる。

「うん、頑張る」

水野さんの思いやりが胸が熱くなった。神様に感謝したいと思った。